

校長室から

令和2年1月17日

阪神・淡路大震災から25年 「幸せ運べるように」

1995年、1月17日、午前5時46分、未曾有の大災害が日本を襲いました。阪神淡路大震災です。この災害で6434人の尊い人命が失われました。兵庫県・淡路島北部が震源で、戦後初めての大都市直下型地震であり、神戸市などで震度7が初めて適用になりました。約25万棟の住宅が全半壊しました。まだ人々が動き出す夜明け前であり、古い木造住宅に被害が集中し、地震そのもので「直接死」した人の約8割が建物や家具の下敷きになった圧死だったと言われていました。

直下型地震は、緊急地震速報が間に合わない場合もありますし、津波や水害と異なり、危険が迫るまでの時間の猶予がありません。当時は、今のように、災害に対する危機意識が醸成されていなかったような気がします。テレビに映し出される阪神地方は、高速道路の高架橋が倒壊されている状況、ビルが倒壊している状況、あちこちで火災が起きている状況、凄まじい状況が次々と報道され続けました。とても我が国で起こっている事とは思えませんでした。

先日、本校で防災講話をしていただいた神戸市の校長先生のご自宅では、タンス等が次々に倒れ、危機一髪の状態、生まれたばかりのお子様を助け出し、すぐに公園に避難したとの事でした。

この惨憺たる状況に対して、日本中のあちこちで支援活動が広がり、それまで日本ではあまり注目されなかった「ボランティア」という言葉、そして行動自体がとても重要なものとして捉えられるようになりました。この年は、1年間で延べ約140万人の方がボランティアとして阪神地方で活動しました。そして、この年は、ボランティア元年と呼ばれるようになり、今ではしっかりと根付きました。

この震災を教訓に様々な制度設計も進みました。住宅補修に関する法律、がれき処理に対する制度、被災者の生活再建支援、NPOの活動推進、自衛隊の方々の避難救助に関する制度等が次々と整えられていきました。そして、日本中の学校では、保護者、地域の方々と協力し、今では、当たり前のようになった地域防災訓練や募金活動を実施するようになりました。その中で中学生の役割も見直されるようになり、1995年は、日本にとって重要な年として記憶され、位置付けられるようになりました。

何もかもすべて失われたように見えた近畿地方、そして神戸では、震災直後に「しあわせ運べるように」という復興ソングが生まれました。当時、神戸市灘区で小学校教諭だった臼井真先生が、震災から2週間後、身を寄せていた親戚宅で、生まれ育った街の変わり果てた姿をニュースで知り衝撃を受け、わずかな時間で作詞・作曲したそうです。この歌はその後、被災地等で歌い継がれ、本校でも先日、神戸に招かれた8名の生徒達が、臼井先生に直接指揮をしていただき、地元神戸の中学生と一緒に歌う機会をいただきました。

**「地震にも負けない 強い心を持って 亡くなった方々の分も 毎日を大切に生きていこう
傷ついた神戸を もとの姿に戻そう 支え合う心と明日への希望を胸に」**とても美しいメロディーでもあり、切なくもあり、希望に満ちた曲でもあります。皆さんも一度、聞いてみてください。地震だけではなく、様々な災害が日本や世界を襲っています。自分自身や他者の命を大切にしていくなをもち続け、被災地で歌い継がれ、有名になったこの曲が忘れ去られるような災害のない日々を祈りたいと思います